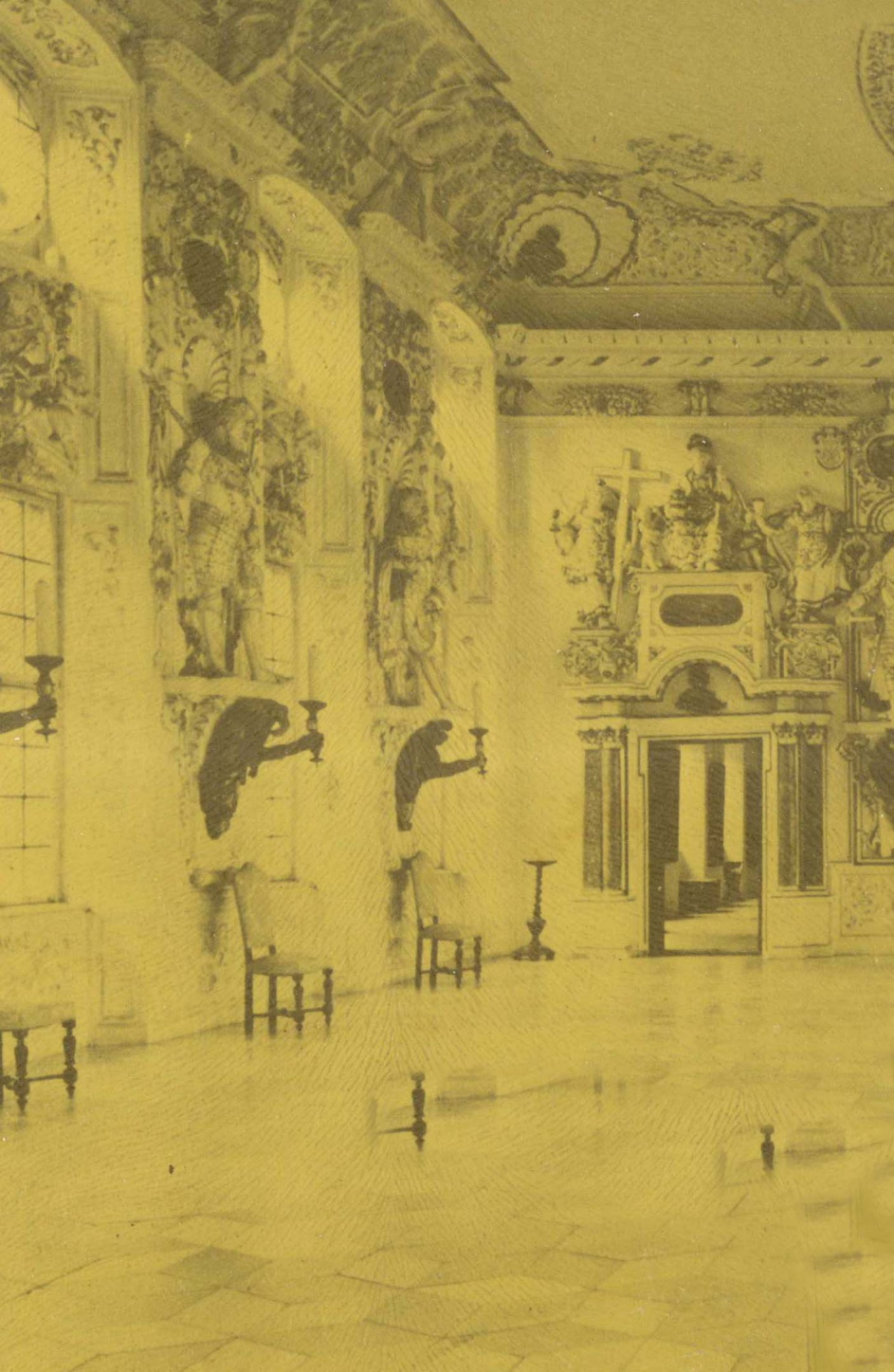




ライン河の舞姫

高柳芳夫



著者紹介

昭和6年生まれ。京都大学文学部独文科・同大学院卒。昭和32年外務省に入り、在独大使館、在ベルリン総領事館勤務、外務省研修所教務主事等を経て、現在、在独大使館一等書記官（文化部長）。

昭和46年「黒い森の宿」にて第10回オール読物推理小説新人賞を受賞。昭和48、51年と江戸川乱歩賞に『禿鷹城』の惨劇、「ライン河の舞姫」で候補作となる。
著書『禿鷹城』の惨劇（講談社刊）

ライン河の舞姫

第1刷 昭和52年3月8日発行

著者 高柳芳夫（たかなぎ よしお）

発行所 株式会社 講談社・発行者 野間省一

〒112 東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京（03）945-1111（大代表） 振替東京8-3930

印刷所 慶昌堂印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

© 1977 YOSHIO TAKAYANAGI Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします

定価はカバーに表示してあります

目次

ライン河観光船	5
盲目の騎士	31
ライン河の薔薇の城	40
古城の晩餐	55
仮面の舞姫	64
密室の罫	80
推理の交錯	96
過去からの殺意	118

回廊の死角……………	140
最後の貴婦人……………	171
天守閣の灯…………… ベル・フーリット	193
美しき容疑者……………	216
解決への推理……………	235
明日なき乾杯……………	259
あとがき……………	278

装幀 井上正篤

ライン河の舞姫

ライン河観光船

1

中部ライン溪谷に、明るい晩秋の陽光が溢れていた。

一九七×年十月二十日の午後である。

午前十一時にコブレンツ市の埠頭を出航した観光船『ライン・ゴールド号』は、物憂いエンジン音を響かせ、日差しを照り返して輝く水面を白く碎きながら、ゆっくりライン河を遡っていた。コブレンツから途中ボッパルト、ザンクト・ゴアール、バッハラッハ、アスマンスハウゼン、ビンゲン等の町々に寄港し、マインツ市を終着港とするライン河定期観光船であった。

私は、『ライン・ゴールド号』の、人影のまばらな舳先のデッキに出て、手摺りに肘をもたせ、移り変わる流れと岸辺の風景に眼を投げていた。

樹木と水と油の匂いを含んだ冷やかな空気が、頬に吹きつけてくる。砂利や石炭を満載した底の浅い貨物船が数隻、眼の前を通り過ぎて行く。舳先の旗竿に渡したロープに、肥った女が洗濯物を干し、そ

の傍で、子供が仔犬と戯れている貨物船もあった。

岸辺には、重畳と重なり合った山脈が逼り、その急峻な斜面には、黄色に葉の色づいた葡萄島が、段をなして麓から山頂まで続いていた。蛇行する流れに従い、観光船が右や左に向きを変えるたびに、葡萄島の中や切り立つ岩の上に、堅固な構えの古城やその廃墟が、幾つとなく見え隠れした。岸辺の町や村は、背後の山に押されて山麓にへばりつくように民家が寄り集っている。窓の手摺りに咲いた赤や黄色の可憐な花が、陽光を一杯に受けて、白壁に鮮かな色彩のコントラストを見せている民家もあった。

絵のように美しい風景を発見するのに馴れた私の眼は、この近景や遠景、両岸に屹立する岩石、樹々の梢、湿った岸辺、聳え立つ古城、遠くから私を招くように青く霞んだ山脈を見てただ感嘆のあまり眼を瞠るばかりだった。

ライン河とその支流ライン川を小船で往来した詩人ゲーテの印象だが、そんな詩人の言葉さえ、心に浮かぶ風景であった。

西ドイツの首都ボンに所在する日本大使館に、若い書記官として勤務する私は、幾度となく、この美しい中部ラインの溪谷を船で上り下りし、両岸の道路を自動車で往復した。

風景自体の美しさなら、これに勝る風景は他にいくらもあるだろう。例えば、スイス・アルプスの雄大、壮厳な景観をよしとする人は多いに違いない。しかし、四季により、天候により、時間により、そしてまた見る場所により千変万化の多様性を示すこのライン河の風景は、見る者の心に深い印象を残さずにはおかないだろう。

私は、初めて中部ラインの景観に接したときのことを思い出す。

それは、やはりある晴れた晩秋の午後であった。私達の小船が、急に方向を変え、岸边に逼る山の陰に入ったとき、突然陽は翳って、冷たい風が吹き、周囲の森が騒いだ。ふと見上げると、鬱蒼と茂る樹木に半ば隠れて、突兀と聳える古城があった。そのとき、私は、私の人生を決定する運命の星が語りかけてくるような戦慄に似た感動を覚えたのである。

私は、デッキに立ち、深い感慨に沈みながら、なおしばらく、絵巻物を広げて行くように左右に展開するライン河の景観に見惚れていた。

2

人影の殆どないデッキに較べて、広い船室は、ほぼ満員の船客のいきれでむんむんしていた。煙草や食事や葡萄酒の匂いの混じった濁った空気が充満し、船客の話し声やグラスや食器の触れ合う音で騒しかった。

その船室の、左舷の中ほどのガラス窓に接したテーブルに、数人の日本人が、固まって席を占めていた。テーブルの上には、ライン葡萄酒の壺やグラスやコーヒー茶碗が並んでいた。

派手な縞の三つ揃いの背広に小肥りの体を包み、胸ポケットに色模様のハンカチをのぞかせた中年の紳士が、金縁眼鏡の奥の眼をすぼめ、いくぶん甲高い声で、他の日本人にライン河の説明をしていた。

船室に下りて来た私を見て、ちょっと話を途切らせ、金縁眼鏡の奥から非難するような眼差しを投げた。「どこへ行っていた？ 大切なお客をはおっておいて、駄目じゃないか」

黙って席につく私を、苦々しげに見やりながら軽く舌打ちし、さらに何か言いたげに口を動かしかけたが、思い返したらしく、顔をもどし、説明を続けた。鹿山貿易株式会社副社長鹿山俊彦である。外交官として在ウィーンの日本大使館に勤務していた彼が、たまたま外遊中の鹿山建設株式会社社長で、参

議院の自由党代議士でもある鹿山康太郎に見込まれ、婿養子として迎えられたのは八年前である。一説には、女婿を物色中と聞いて、ウィーンを訪れた鹿山康太郎につききりでサービスし、大使や伝手つてを頼って二、三人の代議士まで動かし、猛烈に自分を売り込んだとも噂されている。いずれにせよ、日本の建築業界では五指に入る大手企業で、数年来海外諸国におけるビルやホテル、橋梁、ダム、運河等多方面の大型建設にめざましい躍進を遂げている鹿山コンツェルンの一族に収まり込んで、鹿山コンツェルンの貿易部門を一手に引受け、海外進出の足掛りとなっている鹿山貿易株式会社の副社長に、六年前、若冠三十二歳の若さで就任したくらいのものである。才智と要領のよさは、噂通りなのだろう。気障きざな、わざとらしい丁寧な物腰と言葉遣いづかの裏に、自分の頭脳と行動に対する絶対の自信と、他人、特に自己より下位と判断した人間に対する傲慢で苛責ごうない冷酷な意志がちらついている。

向かい側の窓際の席には、顔色の浅黒く、眉の太い厳しい顔付きの小柄な老人が坐っていた。びったりと撫でつけた髪は半白で、頭頂部が薄く、地肌が見えていた。小柄ながら恰幅がよく、精悍な顔付きだが、どこか病み上がりを思わせる弱々しさがあつた。いわゆる福耳ふみみというのだろう。大きく垂れ下がった耳朶みみが、酷薄ともいえる顔付きの厳しさに奇妙な柔らかさのコントラストを添えていた。自由党代議士伍東平太であつた。

伍東平太といえば、かつて日本では、長年政界の黒幕的存在として知られていた男である。だが、七年前の自由党総裁公選で鈴木現総理と総裁の椅子を争って破れ、その後、国有地払下げをめぐる贈収賄事件に連座し、持ち前の政治力と巧みな裏工作で起訴はまぬがれたものの、持病の心臓病の悪化に加えて、勾留中吐血して倒れ、間もなく胃潰瘍いけいの診断で胃の大部分を摘出手術するという打撃が重なって、かつての精力は消え、急速に老け込んだと言われている。それを契機てきに政界に対する野心も殆ど失なつたようで、その後、昔日のように善悪につけ派手にテレビや新聞紙上を賑わす行動もなくなった。現

在は、我が国の一大企業王国住吉コンツェルンの中枢をなす住吉機械工業株式会社と同コンツェルン系列下で海外貿易部門をになう新住吉物産株式会社両社の顧問として、その政治力を商売に最大限に活用することに向けている。伍東の三十年前の政界進出は、もともと住吉コンツェルンをバックにしたもので、彼は、かつて住吉機械工業株式会社の重役であった。

伍東代議士の右隣りには、新住吉物産株式会社の専務取締役佐川啓介が、伍東に寄り添うように控えていた。年齢は四十二、三ほどで、まだ若い、いかにも我が国で名門といわれる住吉コンツェルン系列下の商事会社の重役らしく、スマートな長身を上質の背広で隙なく包み、日本人ばなれした鋭角的な風貌に、妙に世馴れた貫禄と自信を覗かせた紳士である。軽薄な女なら、一目で参ってしまうような、苦味走った好男子であった。

佐川専務の右隣りには、五十過ぎの貧相で瘦せた男がいた。新住吉物産デュッセルドルフ支店長春日武次郎であった。

伍東と向かい合った窓際には、瘦せた色の黒い老人がいた。金融業が本業だが、底知れぬ財力と剃刀のような頭脳とそれに輩下の優秀な情報網を武器に、我が国経済界の間隙に喰い込みつつ、あらゆる事業に首を突っ込んで、常に大儲けしていると噂されている怪物、小佐田源治であった。

小佐田の左隣りに神妙に控えたのは、小佐田興業株式会社デュッセルドルフ駐在員事務所長河野丑松である。頑丈な体格をした中年男である。

河野の隣りには、長身でスマートな初老の紳士がいた。数年前にオランダのアムステルダム市に建設された『ホテル・ニューオークラ・アムステルダム』の総支配人宗像清四郎である。

その隣りに、鹿山がいた。

私は、鹿山に向かい合った春日の右隣りの席に坐った。

「先ほどの観光船が出航したコブレンツ市から終着港のマインツ市までは、距離にしてわずか百キロほどですが、ここは、ライン溪谷のうちでも最も早く開発された地域でしてね。マイン、ナーエ、ラーン、モーゼル等の支流を合せて、景色はすこぶる美しいし、途中には、種々の伝説を秘めて聳える多数の古城や有名なローレライの絶壁、それに古い教会や由緒ある幾つかの町や村など名所旧跡が多く、まあ、ドイツでも有数の観光地といえるところです。春から秋までの観光シーズンには、この船のように、観光客を満載したライン下りの観光船の往来が絶えないところです。ゲーテと同時代のドイツの有名な詩人ハインリッヒ・フォン・クライストも、こんな風に言ってるんですよ。『我々の偉大な庭師が、限らない愛情をこめて作ったドイツで最も美しい土地——それは、マインツからコブレンツまでのラインの岸辺だ』とね。現在は地形も少し変わり、沿岸の工場や往来する船舶からの排液で、水は汚なくなっています。が、それにしても、まだ詩人の言葉通りの美しさじゃありませんか」

鹿山は、すでに葡萄酒で酔っているのか上気した顔で眼を細め、抑揚ある声で喋った。周囲の日本人は、鹿山の説明に耳傾けながら、窓の外に展開する景色に眼を向けていた。

「ライン下りというのは、普通どこからどこまでを指すのかね」

小佐田が、皺に埋まった、狸を思わせる丸くて小さな眼を鹿山に向けた。前に一度ドイツへ来ているが、この中部ラインを往来する観光船に乗るのは初めてだと、『コブレンツで『ライン・ゴルド号』に乗船するとき、彼が言ったのを、私は思い出した。そういえば、ラインに来て観光船に乗った経験のあるのは、鹿山、宗像、春日、河野それに私の五人である。伍東と佐川は何度かドイツに来たが、この中部ラインを船で観光するのは初めてということであった。

「ライン下りというのは、通常このマインツか、あるいは、マインツから三十キロほど下がったビンゲンからコブレンツまで観光船で下ることを言うのですが、今日私達は、逆にコースをとり、コブレンツからビンゲンまで^{さかのぼ}遡って行くわけです。下りですと、ビンゲン、コブレンツ間は三時間半ですが、上りですから五時間ほどかかります」

窓の外には、沿岸の町並や暗褐色の岩肌を見せた崖や黄色に色づいた葡萄畠や樹木の茂る山腹が、上下左右に揺れながら、ゆっくり後方へ流れて行く。

「とにかく、このあたりは、ドイツ有数の観光地ですし、葡萄酒^{ワイน์}の名産地でもあるので、ドイツ人はもちろん、フランス、ベルギー、オランダ、イギリス等の近隣各国や北欧、南欧、さらにアメリカからの観光客は多いし、それに欧州を訪れる日本人は、殆ど一度はこのライン下りをして、ローレライの大岩を見るのが、定まりのコースになっているくらいです。今はもう秋の終り、十月末までで観光船の往来はなくなり、シーズンオフになるので、目立ちませんがね。春、夏の観光シーズンには、このあたりは日本人で一杯ですよ。まあ、我々には、それが幸いなことですがね。は、は、は……」

鹿山は、意味ありげな視線を素早く周囲の日本人に向け、そして、わざとらしい声で笑った。

「ライン河は、どこが源流で、どこへ流れて行くのかね」

小佐田は、初めてのライン河に、かなり興味を感じた様子であった。葡萄酒^{ワイน์}の入ったグラスを美味^{うま}そうに傾けながら、ときどき体乗り出すようにして窓外を覗いている。

「そもそもライン河はですね。スイス・アルプス山中のトマ湖という小さい湖に源流を發し、溪流となつてスイス・アルプスを西から東へ貫流し、スイス・オーストリア国境を流れてポーデン湖に入り、そして、スイス・ドイツ国境、ドイツ・フランス国境を流れてドイツ領に入り、オランダで北海に注いでいます。源流から河口まで全長一、三二六キロ、河川としては世界で大きい方とは言えませんが、古く

から中欧における交通の大動脈として、欧州の歴史に測り知れぬ役割を果してきたのです」

数字をあげて即座に答える鹿山に、テンプルの日本人は、驚嘆のこもった視線を注いだ。私だけが違っていた。心の底に燦る熱い感情を抑え、私は、静かに視線を窓外に向けた。

眼前に、岸辺の小さな村が、逼っていた。

軽快なプラスチックバンドの演奏が、観光船の窓ガラスを通して聞こえて来た。

村役場らしい建物の三階のバルコニーから、獅子の紋章を刺繍した古めかしいゴブラン織が下がっている。その周囲の窓からも、派手な色彩の旗が数枚、ボールの先につけられ、揺れていた。バルコニーには、着飾った男女が十数人立っていた。付近の民家の窓から、多数の男女が顔を出し、下を覗いていた。

岸辺の美しく色づいた銀杏並木の間から、広場の木組みの舞台の上で、色鮮やかな民族衣裳を着た数人の娘が、裾を翻して踊っているのがちらと見えた。広場も通日も、人で埋まっていた。

眼をあげると、賑やかな村のすぐ背後には、葡萄の葉の色づいた山が聳えていた。その山頂に、僅か数十メートルの距離において、堅固な構えの小城郭が二つ、対峙していた。城壁や天守閣は、長年月の風雪に晒され、殆ど周囲の岩肌と変らぬ暗褐色をしている。ただ城壁の一部は、最近修理されたのである。明るい白色のペンキが塗ってあり、それが周囲の山肌と樹木の中で場違いな感じを与えていた。「収穫祭りです。最後の葡萄の取入れがすむ頃、ライン沿岸のあちこちの町や村で、賑やかな祭りが開かれるんですよ」

鹿山が、説明した。

「中世の古城と葡萄の収穫祭りか……」

小佐田が、感に耐えぬように大きく息を吐いた。窓際の伍東も、喰い入るように眼を凝らしていた。

「あの山頂の二つの古城ですが……あれは、それぞれ『シュテレンベルク城』と『リーベンシュタイン城』と呼ばれる古城で、俗称『かたき同志の兄弟』といわれる古城です。骨肉の兄弟が、それぞれ立て籠って、死闘を繰返したという伝説のある城郭です。もっとも伝説では、一人の美女をめぐる争いといわれますが……」

鹿山は、したり顔で説明した。

4

「ところで、ライン河の歴史ですが、これは、実に古いのです。ライン地方に、有史以前の大昔から人々の住んでいたことは、ライン河の支流ネッカー川を少し遡った、あの有名なハイデルベルクから約五十万年前の原人の骨が発見されたり、また我々の会社の支店のあるデュッセルドルフ市近郊のネアンデルタールの山峡から約十万年前の原人の頭蓋骨が発掘されたりして、明白です。しかし、ライン河が明確に歴史の舞台に登場してくるのは、西暦紀元前後のローマ時代からですね。特にローマの史家タキトゥスが、その著書『ゲルマニヤ』の中に、ライン地方に居住したゲルマンの蛮族について記述してか

らなのです」

鹿山は、目の前の私を完全に無視し、得意になり説明を続けた。私は、三日前デュッセルドルフの空港で初めて会った時に感じた、横柄で人を人と思わぬこの男に対する嫌悪が、次第に心中に高まるのを覚えた。

だが、テューブルの、私を除く他の六人の日本人の顔には、鹿山の気障な話し振りに内心反撥を感じながら、彼の該博な知識に対する驚嘆の色が現われていた。

私は、唇を嚙んだ。彼の知識の殆どが、二年のドイツ留学を終えて在ボンの日本大使館に配属にな

った際、留学の成果として私が苦心して纏め上げ、報告書として大使に提出した『ライン河の話』という小冊子から出ていることを知る者はなかった。デュッセルドルフ空港に到着した伍東代議士一行を迎えに行った際、鹿山から密かに要求されて、そのコピーを提供したのである。恐らく東京に送られた私の報告書を、外務省の友人を訪ねた際にでも眼にとめたのであろう。鹿山という男には、こうした要領のよさと強い自己顯示欲がある。特に自分の後輩であり、目下となると、厚顔無恥といつていい態度に出る。

「君は孤児なんだって？ 君の両親は、君が中学生の頃亡くなられたそうだね。それなのに苦学して外務省に入り、今でも大変な努力家だと、外務省人事課にいる友人から聞いてきた。君のことなら、大抵のことは知っているよ」

口辺に笑いを浮かべながら、空港に出迎えた私の耳に、彼は、こうも囁いたものである。彼の言葉は、一瞬私をどきりとさせたが、すぐそれが、初対面の私を、先輩として最初の出会いから抑えつけておこうとするはったりにすぎないことを悟った。彼は、何も知らないのである。私の生い立ちの秘密を知る筈がない。ただ少しばかり聞きかじった事実で、相手を抑えられと思うだけである。

私は、鹿山の性格が、外務省の先輩や同僚達から聞いた噂通りであるのを自分の眼で見た。こんな彼の態度に接しても、私は、内心の感情を抑えて、平静をよそおっていた。彼の話に耳傾け、密かに彼を観察していたのである。

鹿山は、テーブルの上から葡萄酒のグラスをとりあげ、一口飲むと、右手の拇指を背広のチョッキの腕口に差し込み、背を後ろに反らせ、学生に講義する教師のような気障なポーズで、説明を続けた。

「西暦紀元前五十八年から五十一年にかけて、ご存知のジュリアス・シーザーは、勇猛果敢なローマ軍団を率いて、全ガリヤ、すなわち、現在のフランス、ベルギー、西部スイスを席捲し、ライン左岸に達